



Title	吸血鬼の棺
Author(s)	菊竹, 智之
Citation	臨床哲学のメチエ. 2014, 21, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/40505
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

吸血鬼の棺

菊竹智之

私が中学に通い、そして通わなかった街には、モノレールが走っている。そのまだ新しい駅に、顔を出したばかりの朝日が差し込んできている。まるでその光から逃れるかのように、私は、駅の隅つこの薄暗いトイレによく座っていた。

或いはちよつと大きなバスターミナルの椅子に。或いは大きな本屋とかそのトイレ。或いは、或いは…。別に、トイレが好きな訳じゃない。バスターミナルだって。でも私は確かに、家でも学校でもなく、しよつちゅうこの薄暗い場所にいたのだ。



私は中学二年のある時期から、学校に行かなくなった。いじめられていたとかそういう特別な出来事があったわけではない。通学の疲れ、体の弱さ、成績の落ち込み、クラス替え、兄の不登校と復帰、色々なことが重なって、それはきつと、たまたま起こった。

生真面目な母親はとても心配し、あちこちの病院に私を連れて行った。家の近くの大きな病院。学校の近くの小ぢんまりとした病院。少し遠くにある海辺の病院…。家から遠出する感覚が好きで、病院の建物やその周りのことはよく覚えている。だが医者顔の顔のほとんどはもう覚えていない。思い返せば「学校に行けなくなつていい」と言ってくれていた医者もいたはずなのだけれど、当時の私にとっては、彼らは皆おんなじ顔をしていた。

中学生の私には「鬱病」という言葉の意味もよくわかっていなかったけれど、とりあえず「精神の病」であるということだけわかっていて、そしてそれは「狂人」とかそういったイメージと結びついていて、だからわたしは医者顔に「鬱病だ」と告げられた時、激しく困惑し、否定した。「自分の心は病んでなどいない。自分は学校に行きたいけど体が弱いせいで行けないだけなのだ」。そう思っていた。思っていたかった。「普通」でありたかった。だから、私が病院にきちんと通院し続けることはなかった。わたしに治すべき病などないのだから。

だからわたしは駅のトイレにこもつたし、バスターミナルで昼寝をした。「学校に行きたい自分」を信じている限り、毎日毎日家にこもっていることは出来ない。学校に行きたいのに家すら出ないのはおかしいから。だから

ら時々朝どうにか家を出て、そうした場所で時間をつぶしてから家に帰った。そうすれば、「学校に行く努力はしたが途中でしんどくなつて引き返したのだ」という言い訳が使えた。それはきつと、親や教師への言い訳である以上に、自分への言い訳だった。

だからだろうか、バスターミナルの硬い椅子で、私は、家でサボって寝ているよりもちよつぱり気持ちよく眠れた。誰も私へ顔を向けることのないこの場所では、私が学校に行かないことを咎めたり悲しんだりする人はいない。私は静かな闇に埋没できる。

親や教師の「当たり前前の生活を送らせたい」というそのありふれた善意は、善意であるが故に私を包囲した。もし誰かが私を苦しめようとして、それで学校に行かせようとしているのならば、いつそ私は立ち向かえたかもしれない。だけど、そういうわかりやすい悪役は私の物語には登場してくれなかった。彼らは、悪役の使う枷の代わりに、私を見つめながら抱擁をする。私は、その拘束具を壊すこともそれから逃げることもできなかった。



学校に行くという「当たり前」の期待は、太陽の光だった。

それは人々の暖かい善意だった。

だがそれは、木々に動物たちに人々に、そして土竜にも蝙蝠にも吸血鬼にも、無差別に降り注ぐのだ。

そう。わたしは吸血鬼だ。私は朝目覚めない。私は強すぎる光の下では生きていけない。日の光は、その気になかろうと、私を攻撃する。

その光は、私の身体の隅々までを照らそうと、容赦なく侵入してくる。私のおなかの中のひっそりとした暗闇をかき消す。

学校で、家で、病院で。人々は私の何が「悪くて」学校にいけないのかを暴き、学校に行けるようにしようとした。それは全て彼らの優しさだった。

だがその光は、私が内から発する、か細く小さな蠟燭の輝きを見失わせるのだ。私の拙い生命の主張を。

私に必要なのは私を白日の下にさらし外から暴く、光に満ちた広場ではない。暗室だ。痩せ細った蠟燭の炎が自ら語り出す暗闇だ。朝の光は、私には眩しすぎる。

◆ ◆ ◆
学校に行ったり行かなかったり、行かなかったり行ったり。そんな調子で断続的に四年間も続いた不登校は、「高校をやめる」という至って単純な方法で終わりを告げた。その後に編入した定時・単位制の高校は、それなりに薄暗い場所だった。学習が過度に強要されることはないし、成績が順位化されることもなく、同級生たちと競い合うことは必要なかった。常に居るべき場所としてのクラスは存在せず、友達を百人つくることも求められなかった。

◆ ◆ ◆
だがまだそこには学校特有の光がある。私たちの出欠は小さなコンピュータによって確認されていたし、放課後階段でギターを弾いていたら怒られた。大学だって眩しい。誰ともなく就職や将来のことを問い詰めてくる。学校は学校であるというそれだけの理由で、わたしが何の気無くそこに居ることを拒んでいるかのようだ。どこへ行っても、光はつきまといてくるのかもしれない。

そうだ。吸血鬼の私は、自分のために棺を創って、そこで寝ていよう。その棺には伸縮性があって、蓋には小さな隙間が開いている。生ぬるい暗闇を求める者は誰でもその隙間から入ってくると良い。どうか懐中電灯だけは持ち込まないで。

そうしてあたりが薄暗くなってきたら、眠った街で踊ろう。吸血鬼の棺は、ずっと寝るためではなく、そのためにあるのだから。

さあ、朝が来るまで、棺をつくるための素敵な材料と素敵な職人を探しに出かけよう。

夜は短い。これだけは肝に銘じておいて。

きくたけ ともゆき

大阪大学文学部倫理学専修。いくつかの場所で対話や表現活動の探求に取り組んだり取り組まなかったりしている。